

個人差とキャラクターのプロフィেশンシー

堤 良一（岡山大学）

キーワード：個人差、キャラクター、フィラー、スポーツ選手

1. 個人差と日本語教育

プロフィেশンシー研究は、タスク、自然さ、生の、生きた、などと言った概念を重視する。それはとりもなおさず「個」を重視するということである。従来の日本語教育においては、「個」、すなわち個人差はあまり考慮されず、全体から抽出した平均的な日本語の教育が主に行われている。

しかし、母語話者が話す日本語は個人差に溢れており、それを捨象すると、その話者の個性が失われることはもちろん、日本語としての自然さも失われる。日本語のテキストなどで用いられる日本語や音声教材には、個人差を抜いたことによる不自然さというものが、多かれ少なかれあるものと思われる。

しかしながら、個人差を認め、個人差を記述することは容易ではない。極端に言えば、日本語を話す話者の数だけ個人差が想定されるからである（松田発表参照）。本発表では個人差を、キャラクターとの関連で考察し、個人差はキャラクターの中での違いにまでは狭めて考えることができると主張する。その上で、日本語教育の教材にもキャラクターや個人差のあるものを採用すべきであると提案する。

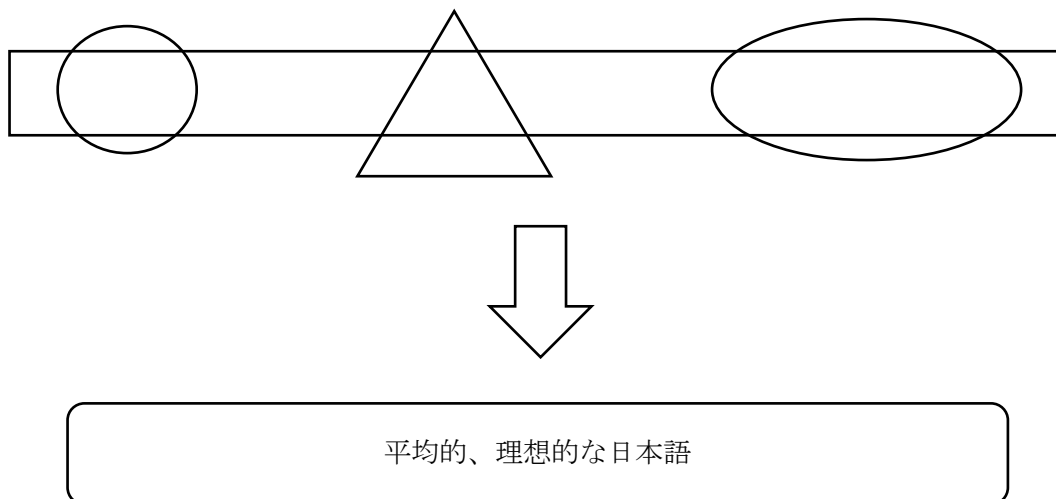
2. キャラクターと自然さ

定延(2011, 2018)などで論じられるキャラクターとは、「意図的に変えられるが、変えてはいけないことになっているもの、それが変わっているところを見ると、見られた方も見た方も気まずい思いをするもの」であり、自在に変えることができる「スタイル」と、不変の「人格」との中間的存在として捉えられている（詳しくは上記文献等）。定延(2011: 84)ではさらに「すべてのことばは役割語である」とされている点が重要である。役割語とは金水(2003)の用語で、ある話し方がある特定の人物像を想起させる場合、その話し方を役割語であるとする。話し方を規定するものがキャラクターであって、それによって変わるすべてのことばが役割語であるとするならば、役割語を話す話者はなんらかのキャラクターをもって話しているということになる。定延(2018: 20)にも同様の言及がある。

そこで我々は、少なくとも日本語を話すときには何らかのキャラクターを演じる必要があると考えよう。逆に言えば、キャラクターを失った発言は日本語として不自然に響くということである。たとえば、日本語教育のテキストでは、「標準的、規範的、平均的」な日本語を教育することを主眼とするために、個々の話し方、くせなどを排し、残った「核」の部分のみを用いて教材が作成される傾向にある。

図1において、円、三角、楕円がそれぞれ個人が話す日本語であるとする、それらにはそれぞれその人のキャラクターが存在しているが、それを捨象して作られた日本語が矢印の下の長方形である。この傾向は特に音声教材に強く表れる。具体的には感情を欠いたような棒読み、明瞭すぎる発音、あるいは反対に、アニメの声優のような極端な抑揚などである。これらはいずれも、現実の人物像からはかけ離れている。最後の場合は、非現実世界のキャラクターとしては自然であるかもしれないが。

テキストの日本語は、この操作にさらに語彙や文型のコントロールを加えるので、およそ現実の日本語からは遠ざかることになる（堤（印刷中））。



【図1 日本語のテキストで用いられる日本語イメージ】

3. 「普通の」キャラクタとフィラー

我々は普段、どのようなキャラクタを演じているのだろうか。定延が指摘するように、それは状況に応じて変化しうる。細かなキャラクタの範疇化を試みることはここでは行わないが、同じ人物が学生であるとき、アルバイトで塾の先生として生徒に対峙するとき、家に帰って家族の一員として振る舞うとき、それぞれで異なったキャラクタを演じ分けることになる（意図的に変えているのではない）。そこで、それぞれのキャラクタにはそれぞれの話し方がある程度あるとすると、**個人差はそのキャラクタの範囲の中で起こる現象である**と見ることができる。このように考えることによって、個人差の幅をある程度狭めて考えることができるようになると思われる。

このことをフィラーの現れ方で確認してみよう。次の表は、国立国語研究所が提供する「名大会話コーパス」のフィラーの現れ方を示したものである。名大会話コーパスは平時の何気ない会話を収録しており、このフィラーの現れ方はいわゆる「普通の」キャラクタを演じているときの我々のフィラーの出現率をおおよそ反映していると考えて問題なからう（表1）。

【表1 「名大会話コーパス」におけるフィラーの出現率】

フィラー	出現回数(A)	(A)/総数 (8555) ×100 (%)
まー	619	7.235534775
あの	3506	40.98188194
えー	806	9.421390999
その	256	2.992402104
あー	2117	24.74576271
えーと	479	5.599064874
んー	449	5.248392753
うー	87	1.016949153

一方、「話し言葉コーパス」における「対話・学会」「独話・学会」におけるフィラーの出方を見てみよう。このとき、話者は<<学者キャラ>>とでもいべきキャラクタを演じている（表2、表3）。「対話・学会」とは学会の講演者に対し、インタビュアーが様々な質問をしてそれに講演者が答えるもの、「独話・学会」は、学会での発表をそのまま書き起こしたデータである。（出典：https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/manu-f/overview.pdf）

【表2 CSJ (対話・学会) におけるフィラー】

フィラー	出現回数(A)	(A)/総数 (868) ×100 (%)
まー	159	18.31797235
あの	259	29.83870968
えー	92	10.59907834
その	86	9.907834101
あー	113	13.01843318
えーと	84	9.677419355
んー	33	3.801843318
うー	23	2.649769585

【表3 CSJ (独話・学会) におけるフィラー】

フィラー	出現回数(A)	(A)/総数 (15516) ×100 (%)
まー	1850	11.92317608
あの	1601	10.31838103
えー	8961	57.75328693
その	450	2.900232019
あー	653	4.208558907
えーと	1108	7.141015726
んー	232	1.49523073
うー	158	1.018303687

表2では「その」が、表3では「えー」が急激に伸びている。「賢そうな」人の話し方を意識すると、このようなフィラーが多く現れるという側面と、文法的な側面、すなわち、普段は使用しないような語彙を用いて専門的なことを小難しく話すときに、頭の中で何が起ころか(定延・田窪(1995)、堤(2008)等)の両方を考えなければならないが、両者のバランスの中で、このような使用差が生じると考えられる。

4. 「スポーツ選手」キャラクタとフィラー

キャラクタによって個人差がさらに狭められる場合がある。それがスポーツ選手の話し方である。ここではサッカー選手とプロ野球選手のフィラーに着目したい。データは「Jリーグ公式チャンネル (<https://www.youtube.com/user/jleaguechannel>) および「パ・リーグTV (<https://tv.pacificleague.jp/ptv/pc/>) から採集している。サッカー選手26名、野球選手8名のデータである。なお、金子他(2019)が同様の調査をサッカー選手37名、野球選手40名に行っており、同様の結果を報告している。

【表4 サッカー選手と野球選手のフィラー】

フィラー	サッカー選手		野球選手	
	出現回数	%	出現回数	%
まー	190	47.73869	25	20.16129
あの	40	10.05025	25	20.16129
えー	128	32.1608	72	58.06452
その	5	1.256281	0	0
あー	0	0	0	0
えーと	2	0.502513	0	0
んー	33	8.291457	2	1.612903
うー	0	0	0	0

両者の大きな違いとして、サッカー選手は「まー」の使用が非常に目立つ一方、野球選手は「えー」の使用が目立つ。インタビューの質問に対して、サッカー選手は「まー」で返し、野球選手は「えー」で返答しているといっても過言でないほど、この違いは顕著である。

なぜこのような違いが生じるのであろうか。現段階で確定的な結論を導くことはできないが、文法的な考察が必要であろう。フィラーの「まー」は「まとめあげ」という心

内操作に対応すると考えられる(長瀬(2014)、堤(2017)他)。試合直後のサッカー選手は疲れ等の理由から、あまり多くを語りたくはなく、インタビューを早く切り上げるために「まー」を多用する。試合

の結果によってフィラーの出方が変わるかを調べた金子他(2019)では、「まー」と息すすりが敗戦時のインタビューにおいて勝利時のそれよりも頻出すると報告されている。

このようなサッカー選手の「多くを語りたくない」という態度は、サッカー選手内で連綿と受け継がれ、それがキャラクタ化したものと考えられる。先の<<学者キャラ>>において「その」が増加する文法的な理由については堤(2008)で明らかにしている。つまり、キャラクタの形成には文法的な側面と、そのように話したいというキャラクタ側の欲求との化学反応のようなものがあると考えられる。繰り返しになるが、個人差はこのような中で考察されるべきであろうと思われる。すなわち「まー」と言うのは、「まとめあげたい」そして、「サッカー選手たるものこのように話すもの」という 2 つのバランスの取り方として個人差を捉えるということである。

5. まとめ

以上、キャラクタと個人差について考察した。日本語教育にとっては特に、キャラクタを抜き去った平均的、規範的な教材については検討する必要があるのではないかということを主張した。個人差をキャラクタの中で捉えることにより、個人差の研究に道が開ける可能性がある。

参考文献

- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和(2011)「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」, 藤村逸子、滝沢直宏(編)『言語研究の技法: データの収集と分析』pp. 43-72, ひつじ書房.
- 金子菜由・五百蔵由夏・金重ちひろ・松本実結(2019)「スポーツ選手のフィラーについて」, Ms., 岡山大学課題演習における口頭発表 (ppt.資料)
- 金水 敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』, 岩波書店.
- 長瀬優希(2014)「フィラー「まあ」の研究～インタビュー場面の分析を通じた一考察～」, 平成 26 年度岡山大学文学文学部卒業論文
- 定延利之(2011)『日本語社会のぞきキャラくり』, 三省堂.
- 定延利之(2018)「キャラ論の前提」, 定延利之(編)『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』, 10-45, 三省堂.
- 定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(一)」—」, 『言語研究』, 108: 74-93, 日本言語学会.
- 堤 良一(2008)「談話中に現れる間投詞アノ(一)・ソノ(一)の使い分けについて」, 『日本語科学』23, 17-36, 国書刊行会.
- 堤 良一(2017)「アノー、ソノー、エーットね……何がしたいの?」, 岡崎友子・堤良一・松丸真大・岩田美穂(編)『ココが面白い! 日本語学』, 151-164, ココ出版.
- 堤 良一(印刷中)「初級レベルのコミュニケーション教育—コミュニケーションを重視すると初級の教育はどう変わるか? —」, 上智大学言語学会.

コーパス

名大会話コーパス

日本語話し言葉コーパス

【謝辞】本研究は、JSPS の科学研究費補助金(16K02738, 17K02775) の助成を受けている。